

**魚種（海域）：スルメイカ（太平洋～オホーツク海海域）**

担当：釧路水産試験場（澤村正幸），函館水産試験場（有馬大地）

**要 約**

評価年度：2018年度（2018年4月～2019年3月）

2018年度の漁獲量：5,061トン（前年比0.97）

資源量の指標	全国の資源水準	北海道への来遊水準
漁獲量	低水準	低水準

太平洋～オホーツク海海域へ来遊するスルメイカの主群である冬季発生系群の2018年の資源量は前年より減少し、低水準と評価された。本海域へ来遊したスルメイカの漁獲量は前年度から減少し、1990年以降で最も低い値となった。太平洋海域における小型イカ釣り船の漁獲も、釧路港で2年ぶりの漁獲がみられたものの十勝港は前年度に続き漁獲がなく、函館港・浦河港でもCPUEは前年度から低下した。太平洋海域の漁獲量を資源量の指標とした来遊水準指数は低水準と判断された。

**1. 資源の分布・生態的特徴****(1) 分布・回遊**

東シナ海～サハリン西岸～中・南部千島周辺に分布する。秋季発生系群は、9～12月に日本海南西部～東シナ海でふ化し、成長しながら日本海を北上する。主群は7月頃に道南海域へ来遊する。冬季発生系群は、1～4月に東シナ海でふ化し、成長しながら太平洋と日本海を北上する。主群は道南海域～道東太平洋へ8月頃に来遊する。8～9月に分布域を最も北の海域まで広げ、10月以降産卵のため南下回遊に転ずる。根室海峡～オホーツク海沿岸へは11月頃に来遊する。

**(2) 年齢・成長**

月齢	6ヶ月	7ヶ月	8ヶ月	9ヶ月
外套長(cm)	18	22	26	28
体重(g)	121	233	361	484

\*）外套長：菅原ほか<sup>1)</sup>から計算\*）体重：山下ほか<sup>2)</sup>から引用

\*）ふ化後、産卵して死亡するまでの寿命はほぼ1年である。

\*）北海道太平洋～オホーツク海海域へ来遊するスルメイカの月齢は9ヶ月まで。

**(3) 成熟年齢・成熟体長**

・オス：孵化後約9か月で成熟して、メスと交接する。

・メス：孵化後10か月以降、オスより遅れて産卵の前に生殖器官を発達させて成熟する。

- \* ) オスはメスに先がけて成熟する。
- \* ) 道東太平洋からオホーツク海ではメスの成熟個体はほとんど見られない。

#### (4) 産卵期・産卵場

- ・産卵期：秋季発生系群では9～12月で、冬季発生系群では1～4月である。
- ・産卵場：日本海南西部から東シナ海である。

## 2. 漁業の概要

### (1) 操業実勢 (図1)

漁業	漁期	主漁場	主要な漁具	着業規模
いか釣り	6月～1月	太平洋沿岸, オホーツク海沿岸	いか釣り	渡島：567隻(2017許可) 胆振：93隻(2018許可) 日高：66隻(2017許可) 十勝：49隻(2018許可) 釧路：125隻(2017許可) 根室：141隻(2017許可) オホーツク：49隻(2017許可) 宗谷：3隻(2017許可)
沖合底びき網漁業*	9月～1月	太平洋, オホーツク海沿岸	かけまわし, オッタートロール	胆振：5隻(か) 日高：2隻(か) 十勝：2隻(か) 釧路：7隻(か), 2隻(オ) オホーツク：5隻(か), 2隻(オ) 宗谷：1隻(か)
定置網	6月～11月	太平洋, オホーツク海沿岸	建網	

\*沖合底びき網漁業 (か：かけまわし, オ：オッタートロール)

### (2) 資源管理に関する取り組み

1998年度よりTAC対象種に指定されており、TACにより漁獲量が管理されている(表1)。

## 3. 漁獲量および漁獲努力量の推移

### (1) 漁獲量

**全国** 日本国内における冬季発生系群の漁獲量は<sup>2)</sup>、1980年代の低い水準から1990年代に入り増加し、10万～20万トン台で推移した(図2)。1998～1999年に大幅に減少したあと再び増加して2011年度には18.6万トンに達したが、その後減少が続き、2017年は約2.9万トンであった。

スルメイカのTACは、1998年から2003年まで45万～53万トン、2004年から2010年まで30万トン台、2015年に43万トンとなったがその後は一貫して減少し、2018年は6万7千トンとなった(表1)。集計期間は2013年までが暦年、2014年以降は漁期年(4月～翌年3月)となっている。北海道知事管理分は、1998年から2018年まで若干量に設定されている。

**北海道** 表2, 図3に、北海道の太平洋～オホーツク海におけるスルメイカ漁獲量の経年変化を示した。全国の漁獲量の推移と同様に、1980年代後半から増加傾向となり、1997年度

まで4.2万～11.0万トンの比較的高い水準で推移した。1998、1999年度には約3.0万トンと減少したが、2000年度に9.0万トンまで急増し、その後2012年度まで2.8万～8.6万トンの間で増減を繰り返した。しかし、2013年度以降減少が続き、2018年度は0.5万トンとなった。

海域別では、太平洋が2000年度以降2.3万～5.6万トンで変動していたが、2016年度に7,334トンと急減し、2018年度は4,745トンで前年(4,873トン)を下回り、1990年度以降で最も低い値であった。このうち道南4,268トン(いか釣り1,749トン、沖底828トン、定置網他1,696トン)、道東477トン(いか釣り438トン、沖底:39トン)であった。オホーツク海は、1991年度以降0.4万～5.1万トンで大きく変動していたが、太平洋と同じく2016年度以降急減し、2018年度は316トンであった。そのうち、根室海峡169トン(いか釣り70トン、定置網他:100トン)、オホーツク・宗谷146トン(沖底:17トン、定置網他:130トン)であった。

本海域における2018年度の合計漁獲金額は51億円(前年65億円)であった。

## (2) 漁獲努力量

表3に、道南太平洋の函館港、浦河港、道東太平洋の釧路港、十勝港、花咲港、オホーツク海の羅臼港における小型いか釣り船の延べ水揚げ隻数を示した。道南太平洋については、函館港の延べ隻数は1997年度以降長期的に減少傾向にあり、2018年度は1,758隻と前年度(2,315隻)を下回り、1985年度以降で最少となった。浦河港における延べ隻数は1993年度以降2,000隻前後で変動していたが、2014年度以降は減少して2017年度に435隻と過去最少の値となった。2018年度は1,588隻で前年の3倍以上となったものの、過去との比較では依然として低い値であった。道東太平洋については、釧路港で2年ぶりに漁獲がみられ、延べ隻数は131隻であった。十勝港では前年に続き漁場形成がなく水揚げ隻数は0であった。花咲港は439隻で前年度(249隻)を上回った。オホーツク海の羅臼港における延べ隻数は2010年度以降ほとんどの年で3,000隻を超えていたが、2016年以降急減し、2017年度に過去最少の349隻となった。2018年度は1,128隻で前年度を上回った。

1996年度以降のスルメイカを対象とした沖合底曳き網漁業の曳網回数は、道南太平洋(襟裳以西)では2003年度の758回をピークに減少傾向にあり、2018年度は20年ぶりに0回(前年度:232回)となった。道東太平洋(道東)は1996年度の1,139回から減少して2010年度までおおむね200回以下で推移したのち、2011年度から2015年度にかけてはやや増加しておおむね200回から400回の範囲にあった。しかし2016年以降は急減し、2018年度は前年度に続き0回であった。オホーツク海(オコック沿岸)では2013年度の2,134回をピークに年により大きく変動し、2018年度は3年連続して0回となった。

## 4. 資源状態

### (1) 現在までの資源動向

平成30年度スルメイカ冬季発生系群の資源評価<sup>2)</sup>から、スルメイカ冬季発生系群の資源

量は、日本国内における冬季発生系群の漁獲量（図 2）と同様に、1980 年代の低い水準から 1990 年代に入って増加し 1996 年には 103 万トンとなった（図 4）。その後 2014 年まで 71 万～103 万トンと比較的高い水準で推移していたが、2015 年以降資源量が大きく減少し、2018 年の資源量は低水準と評価されている。

## 5. 北海道への来遊状況

### (1) 当業船の漁獲動向

図 5 に函館港および浦河港、釧路港、十勝港、花咲港における小型いか釣り船の CPUE（1 日 1 隻あたり漁獲量 kg）を示した。2018 年度の CPUE は函館港が 128（前年度 174）、浦河港が 386（前年度 404）、花咲港が 393（前年度 404）でいずれも前年から減少した。釧路港は 2 年ぶりに水揚げがみられ CPUE は 393 であったが、過去との比較では依然として低い値であった。十勝港では前年度に続き水揚げが無かった。全体として、道東太平洋への来遊水準は前年度に続き低い水準であったと考えられる。

オホーツク海におけるスルメイカ漁獲量は 1991 年度以降 0.4～5.1 万トンで大きく変動したのち、2010 年度から 2014 年度にかけては約 2 万トンから 5 万トンの高い値で推移した。しかし 2015 年度以降急減し、2018 年度は 485 トンで前年度の 432 トンを上回ったものの、依然として過去最低の水準にある（表 2、図 2）。このことから、オホーツク海への来遊量は前年度に続き低い水準であったと考えられる。

### (2) 調査船調査の状況

2018 年 8 月の調査結果から各調査点の CPUE を図 6 に示した。各調査点の CPUE（いか釣り機 1 台 1 時間あたり漁獲尾数）は道東太平洋が 0～18.2、道南太平洋が 0.3～3.1 であった。道東太平洋沿岸の分布密度は 2015 年以前には全体的に高い値を示したが、2016 年以降は大きく低下している。一方、道南太平洋の 2013 年以降の分布密度は、道東太平洋ほどの顕著な減少はみられない。

オホーツク海への回遊仮説<sup>3,4)</sup>として、8 月下旬の釧路以東の分布が多い事と北方四島周辺の 7 月の水温が高い事などが来遊の多い要因とされている。気象庁発表の日別海水温データでは、2018 年は、魚群の北上期にあたる 7 月～8 月に根室海峡～北方四島周辺に水温の低い海域がみられ、調査船調査による釧路以東の分布量も低かったことから、オホーツク海への来遊量は少なかったと考えられる。一方、8 月の襟裳岬東側には局地的に分布密度の高い海域がみられた。

### (3) 2017 年度の北海道への来遊状況：低水準

北海道への来遊量の目安となる北海道太平洋～オホーツク海海域における漁獲量は冬季発生系群の資源量と強い正の相関を示し（1985～2018 年度、 $n=34$ 、 $r=0.86$ 、 $p<0.01$ （ $t$  検定)), 冬季発生系群の資源変動の影響を強く受けていると考えられる。2018 年の冬季発生系群の資源量は約 15.3 万トンと推定され、前年 22.5 万トンから減少した。

来遊水準の指標として、全ての漁法の情報が含まれている北海道太平洋海域の漁獲量を用いた（図7）。1995年度から2014年度の20年間の平均値を100とし、 $100 \pm 40$ の範囲を中水準、その上下をそれぞれ高水準、低水準とした。2018年度に当海域に来遊したスルメイカの来遊水準指数は12で低水準と判断された。北海道太平洋海域及びオホーツク海域の合計漁獲量を指標とした参考値では、2018年の来遊水準指数は9となり、同じく低水準と判断された。

#### (4) 今後の資源動向：横ばい

スルメイカは1つの年級群で資源が構成されるため、毎年度の新規加入量によって資源量が大きく変動する。しかし、平成30年度スルメイカ冬季発生系群の資源評価<sup>2)</sup>によると2019年級群を生む親魚量は $B_{limit}$ を下回っており、短期的に資源が回復する可能性は低い。道南及び道東太平洋での漁獲は2018年度も継続しているものの、漁場の形成は散発的であり、今後の資源動向は現在の低い水準のまま横ばいの状態が続くと考えられる。

## 評価方法とデータ

### (1) 資源評価に用いた漁獲統計

漁獲量	水試調べおよび漁業生産高報告。2017, 2018 年度は水試集計速報値を含む。 道南太平洋：渡島（松前，福島町および八雲町熊石地区を除く），胆振，日高振興局管内 道東太平洋：十勝，釧路，根室振興局管内の太平洋側 オホーツク海：羅臼町およびオホーツク，宗谷振興局（枝幸，浜頓別町，猿払村および稚内市宗谷地区）管内
漁獲努力量	羅臼港，函館港，浦河港，釧路港，十勝港における小型いか釣り船の延べ操業隻数（各漁協の荷受資料に基づく水試集計値） 北海道沖合底曳網漁業漁場別漁獲統計年報

### (2) 漁船の努力量および CPUE

道南太平洋の主要港である函館港と浦河港，道東太平洋の主要港である釧路港と十勝港における小型いか釣り船の延べ操業隻数（以下，延べ隻数とする）と漁獲量，およびオホーツク海の主要港である根室海峡の羅臼港における延べ隻数を用いた（函館水試と釧路水試資料）。函館港，浦河港，十勝＋釧路港の CPUE を小型いか釣り船の 1 隻 1 日当たりの漁獲量として算出した。

沖合底曳き網漁業（かけまわし）の努力量については北海道沖合底曳網漁業漁場別漁獲統計年報を用い，中海区の「オコック沿岸」，「襟裳以西」，「道東」において，スルメイカの漁獲量が 80% 以上となる曳網（スルメイカ対象の曳網と判断）を集計した。

### (3) 調査船調査

釧路水産試験場所属の試験調査船北辰丸および函館水産試験場所属の試験調査船金星丸によって，2018 年 8 月に北海道太平洋海域で行った調査結果を用いた。各調査点における CPUE（自動いか釣り機 1 台 1 時間あたりの平均漁獲尾数）を求めた。

## 文 献

- 菅原美和子，山下紀生，坂口健司，佐藤充，澤村正幸，安江尚孝，森賢，福若雅章：太平洋を回遊するスルメイカ冬季発生系群の成長に及ぼす孵化時期と性差の影響。日本水誌，79，823-831（2013）
- 加賀敏樹，山下紀生，岡本俊，濱津友紀：平成 30(2018)年度スルメイカ冬季発生系群の資源評価。平成 30 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第 1 分冊。東京，水産庁増殖推進部・独立行政法人水産研究・教育機構，652-697（2019）
- 坂口健司：北海道周辺海域で標識放流されたスルメイカの移動。北水試研報，77，45-

72 (2010)

- 4) 坂口健司, 山下紀生: オホーツク海におけるスルメイカの漁獲量の予測方法. 水産海洋研究. 79(2), 43-51 (2015)

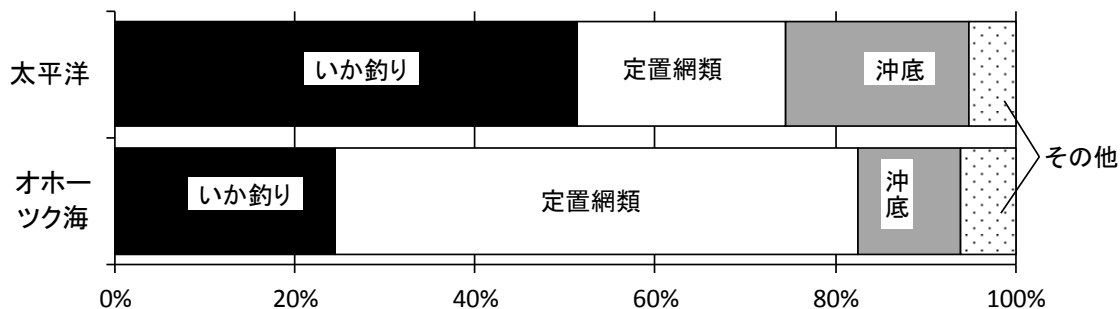


図1 北海道太平洋及びオホーツク海のスルメイカ漁獲量に占める各漁業種の割合 (2013～2017年度の平均値)

表1 スルメイカTACの推移

年度	西暦	TAC (全国計)	大臣管理分	北海道知事管理分	集計期間
平成10	1998	450,000	322,000	若干	暦年
11	1999	500,000	322,000	若干	暦年
12	2000	500,000	322,000	若干	暦年
13	2001	530,000	375,000	若干	暦年
14	2002	530,000	375,000	若干	暦年
15	2003	530,000	375,000	若干	暦年
16	2004	385,000	254,000	若干	暦年
17	2005	359,000	254,000	若干	暦年
18	2006	359,000	254,000	若干	暦年
19	2007	322,000	228,000	若干	暦年
20	2008	333,000	228,000	若干	暦年
21	2009	333,000	228,000	若干	暦年
22	2010	318,000	220,000	若干	暦年
23	2011	297,000	204,700	若干	暦年
24	2012	339,000	235,200	若干	暦年
25	2013	329,000	226,000	若干	暦年
26	2014	301,000	205,800	若干	漁期年
27	2015	425,000	235,200	若干	漁期年
28	2016	256,000	168,600	若干	漁期年
29	2017	136,000	86,500	若干	漁期年
30	2018	97,000	60,200	若干	漁期年
令和1	2019	67,000	34,500	若干	漁期年

注) 2014年4月より集計期間が漁期年(4月～翌年3月)に変更された。北海道知事管理分は、5トン未満のいか釣り、定置網、刺し網などが含まれる。大臣管理分は、全国の5トン以上のいか釣り、沖合底びき網、大中型まき網が含まれる。2011年は期中改訂後の数字。

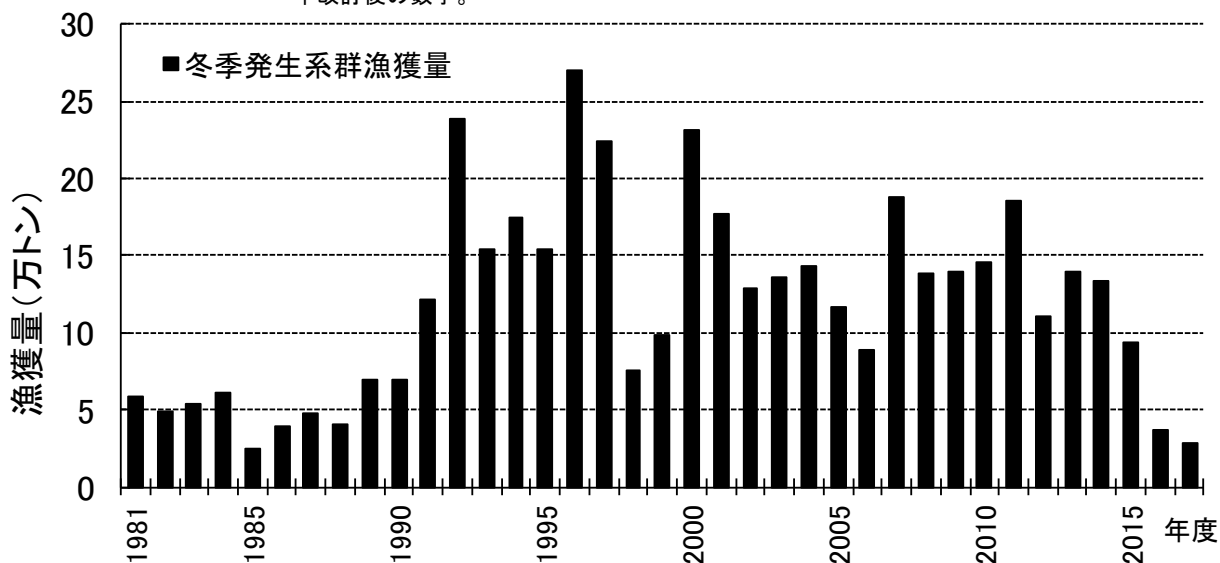


図2 冬季発生系群スルメイカ漁獲量の経年変化 (日本国内分) (平成30年度スルメイカ冬季発生系群の資源評価<sup>2)</sup>より)



表2 北海道の太平洋～オホーツク海におけるスルメイカ漁獲量の経年変化(単位:トン)

年度	太平洋										オホーツク海										北海道の太平洋～オホーツク海合計	
	道南					道東					根室海峡					オホーツク・宗谷					合計	小計
	いか釣り	沖底	定置網他	小計	いか釣り	沖底	定置網他	小計	いか釣り	沖底	定置網他	小計	いか釣り	沖底	定置網他	小計	いか釣り	沖底	定置網他	小計		
1981 S.56				3,801	321	24	345	4,146				78				1,069	1,148				5,294	
1982 S.57				1,911	4	0	4	1,915				18				374	392				2,307	
1983 S.58				11,342	2,493	258	2,751	14,093				49				1,429	1,478				15,571	
1984 S.59				6,582	3,899	174	4,073	10,655				3				1,334	1,338				11,993	
1985 S.60	446	15	177	638	1	8	8	646				6				1,982	1,988				2,634	
1986 S.61	1,296	5	400	1,701	34	10	44	1,744				8				183	191				2,935	
1987 S.62	1,928	1	1,017	2,946	36	15	51	2,998				34			7	892	898				3,930	
1988 S.63	2,234	61	1,110	3,405	6	3	9	3,415				10				1,053	1,064				4,478	
1989 H.1	9,360	367	3,987	13,714	58	406	464	14,178				971			1	850	851				16,000	
1990 H.2	5,567	42	2,916	8,525	4,415	957	5,372	13,897				3,220			131	573	704				18,805	
1991 H.3	9,573	319	8,185	18,076	10,090	882	10,973	29,049				5,900			715	1,773	2,488				41,718	
1992 H.4	20,116	213	28,046	48,375	15,458	1,042	16,500	64,875				10,878			3,434	8,970	12,403				97,156	
1993 H.5	22,362	2,206	11,071	35,638	2,820	217	3,037	38,676				2,161			395	923	1,318				46,429	
1994 H.6	15,998	2,624	15,673	34,295	6,363	1,256	7,619	41,915				4,968			2,053	967	3,020				57,443	
1995 H.7	15,759	2,920	22,227	40,907	4,222	596	4,817	45,724				8,375			3,908	9,605	13,513				79,389	
1996 H.8	27,677	3,736	21,568	52,981	10,141	2,784	12,925	65,906				9,285			6,644	16,538	23,182				110,224	
1997 H.9	27,632	7,365	30,873	65,870	3,948	2,559	6,507	72,377				6,689			2,757	3,446	6,204				91,058	
1998 H.10	9,325	911	10,500	20,736	3,750	779	4,528	25,264				946			344	457	800				30,065	
1999 H.11	9,603	49	8,373	18,025	967	332	1,299	19,325				1,820			358	3,179	3,537				26,669	
2000 H.12	17,217	924	15,837	33,978	4,307	1,638	5,945	39,923				16,967			8	4,093	11,875				90,416	
2001 H.13	15,697	2,532	15,892	34,121	4,456	1,510	5,966	40,087				7,382			2	584	3,085				59,981	
2002 H.14	7,499	1,343	11,614	20,456	1,918	327	2,245	22,701				3,877			0	803	4,598				34,604	
2003 H.15	19,955	5,725	24,975	50,655	3,436	1,564	4,999	55,655				498			262	1,610	1,872				60,218	
2004 H.16	16,300	1,964	7,438	25,702	4,224	1,403	5,627	31,329				2,224			960	1,485	2,445				40,016	
2005 H.17	11,980	2,493	11,497	25,969	6,605	874	7,479	33,448				1,747			478	1,480	1,958				40,444	
2006 H.18	9,098	1,283	8,025	18,407	4,275	1,792	6,066	24,473				294			135	1,669	1,804				28,189	
2007 H.19	15,453	1,350	22,898	39,701	5,243	2,980	8,224	47,925				4,509			1,686	3,682	5,368				64,127	
2008 H.20	20,380	3,192	24,658	48,230	3,499	1,119	4,617	52,848				1,657			229	2,982	3,211				60,926	
2009 H.21	15,925	3,615	8,685	28,225	5,244	2,953	8,197	36,422				1,250			124	1,954	2,079				42,852	
2010 H.22	10,204	3,371	5,123	18,698	5,658	1,529	7,187	25,885				9,117			2,619	14,575	17,194				61,438	
2011 H.23	11,382	1,560	6,936	19,879	10,477	4,225	14,702	34,580				10,167			823	4,575	21,578				85,585	
2012 H.24	14,078	398	4,651	19,127	7,971	4,342	12,314	31,441				5,469			156	813	4,134				49,821	
2013 H.25	11,285	539	5,712	17,536	9,454	1,178	10,632	28,168				12,019			23	5,756	12,393				68,700	
2014 H.26	8,507	841	5,304	14,652	12,460	5,038	17,498	32,150				6,973			6	4,616	8,278				54,766	
2015 H.27	5,651	1,239	1,463	8,353	11,180	6,308	17,488	25,841				3,840			3	859	2,736				35,691	
2016 H.28	3,262	797	825	4,885	908	1,541	2,449	7,334				161			28	406	434				8,177	
2017 H.29	2,175	1,021	1,536	4,732	120	21	141	4,873				39			41	189	229				5,204	
2018 H.30	1,749	823	1,696	4,268	438	39	477	4,745				70			17	130	146				5,061	

注: 道南太平洋は渡島(松前・福島町および八雲町熊石地区を除く)、胆振・日高振興局管内、道東太平洋は十勝・釧路・根室振興局管内の太平洋側、根室海峡は羅臼町。  
オホーツク・宗谷はオホーツク総合振興局(枝幸・浜頓別・猿払村および稚内市宗谷地区)管内、資料は漁業生産高報告と水試調べ資料、2017、2018年度は水試集計速報値を含む。

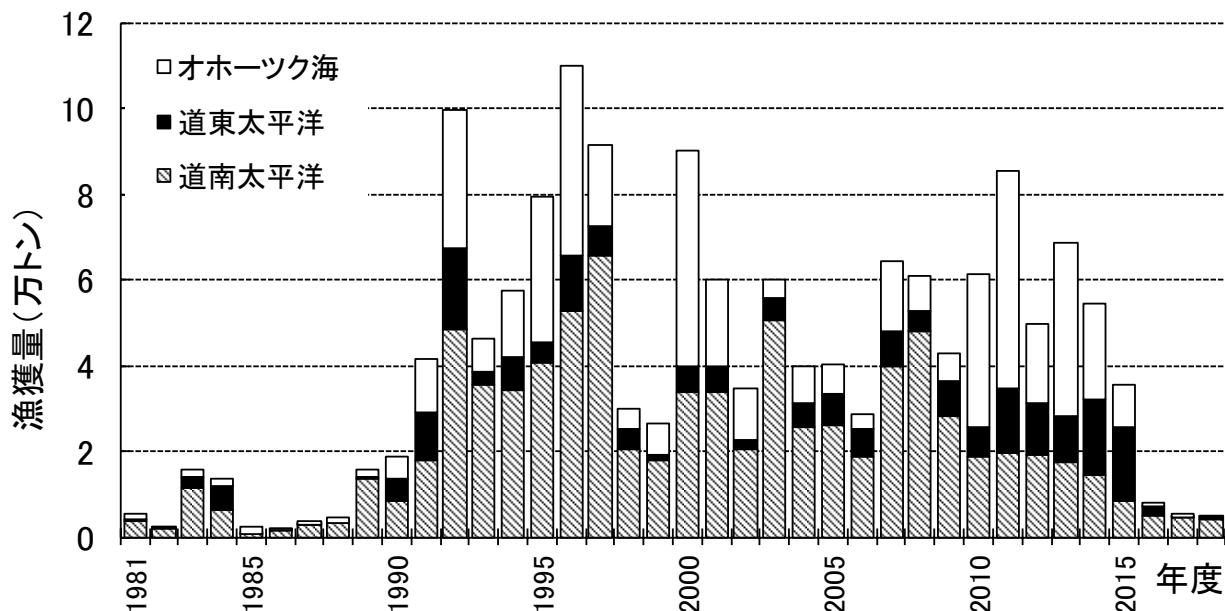


図3 北海道の太平洋～オホーツク海におけるスルメイカ漁獲量の経年変化

表3 北海道の太平洋～オホーツク海における操業隻数及び漁獲努力量の経年変化

年度	いか釣り延べ操業隻数						沖底曳網回数（かけまわし）*		
	道南太平洋		道東太平洋			オホーツク海	道南太平洋	道東太平洋	オホーツク海
	函館港	浦河港	十勝港	釧路港	花咲港	羅臼港	襟裳以西	道東	オホーツク沿岸
1985	5,788	—	6	4	—	—	—	—	—
1986	11,441	—	150	21	—	—	—	—	—
1987	10,228	—	150	18	—	—	—	—	—
1988	10,085	—	24	4	—	—	—	—	—
1989	11,028	—	100	—	—	—	—	—	—
1990	9,529	—	821	2,819	—	—	—	—	—
1991	9,274	—	1,672	4,321	—	—	—	—	—
1992	8,856	—	1,595	4,788	—	—	—	—	—
1993	10,281	2,620	457	725	—	1,613	—	—	—
1994	9,305	2,661	635	1,990	—	3,364	—	—	—
1995	8,389	2,199	243	2,096	—	5,368	—	—	—
1996	11,375	1,371	686	2,932	—	4,864	530	1,139	1,880
1997	8,105	3,215	130	1,431	—	3,743	681	844	311
1998	7,563	2,188	533	1,424	—	1,231	93	16	10
1999	6,822	1,661	194	1,294	—	1,522	0	39	12
2000	7,367	2,024	471	1,324	—	3,182	128	129	630
2001	6,421	1,083	233	1,351	—	2,112	321	180	23
2002	6,850	1,209	109	1,229	—	2,306	212	10	72
2003	6,651	3,084	149	1,645	—	791	758	336	0
2004	6,621	2,978	96	1,441	1,106	1,537	403	97	30
2005	5,835	2,017	486	2,250	939	1,678	619	112	0
2006	4,688	1,970	329	2,118	—	531	252	217	0
2007	5,591	1,883	600	2,617	187	2,924	218	178	51
2008	5,061	2,749	903	1,562	251	1,027	587	83	0
2009	4,538	2,989	387	1,998	391	785	517	140	0
2010	3,956	1,730	797	2,219	678	3,795	443	81	777
2011	3,463	2,002	1,410	2,148	1,332	5,181	252	369	856
2012	3,043	2,980	1,418	2,911	876	2,910	145	397	123
2013	3,306	2,228	1,981	1,750	1,909	6,419	247	29	2,134
2014	2,728	1,495	1,780	2,808	3,829	5,171	387	278	1,673
2015	2,668	966	2,439	3,846	4,460	4,578	141	477	241
2016	2,120	1,775	454	671	1,379	1,196	229	19	0
2017	2,315	435	0	0	249	349	232	0	0
2018	1,758	1,588	0	131	439	1,128	0	0	0

※スルメイカの漁獲が80%を超えた曳網の回数

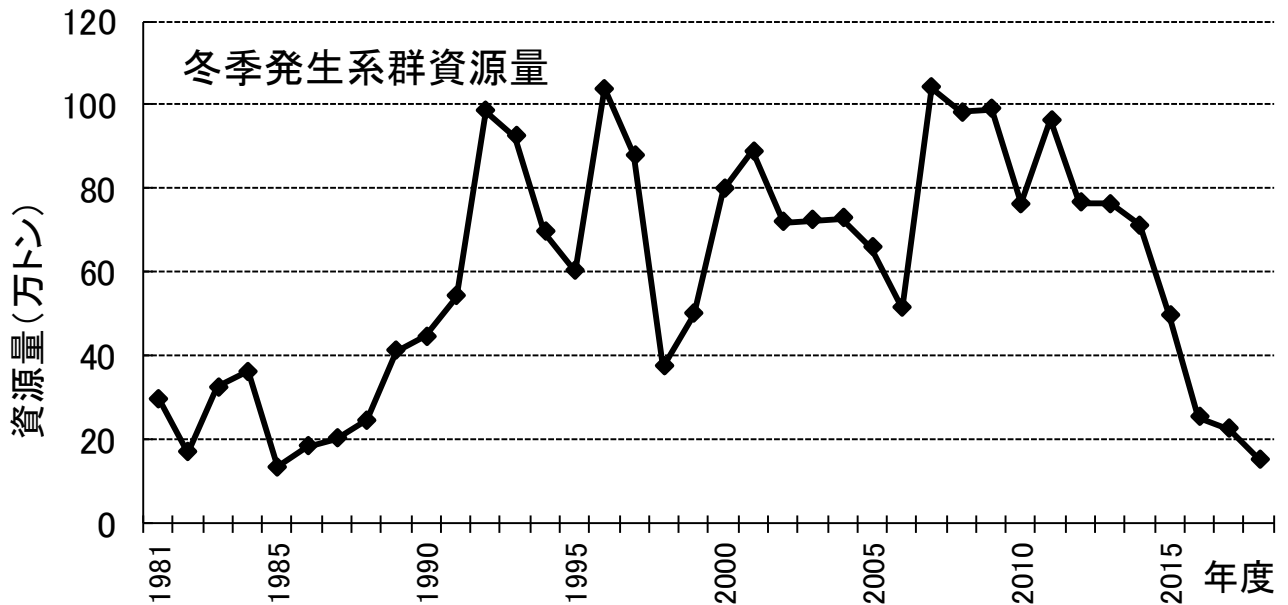


図4 冬季発生系群スルメイカ資源量の経年変化  
(平成30年度スルメイカ冬季発生系群の資源評価<sup>2)</sup>より。2018年度は推定値)

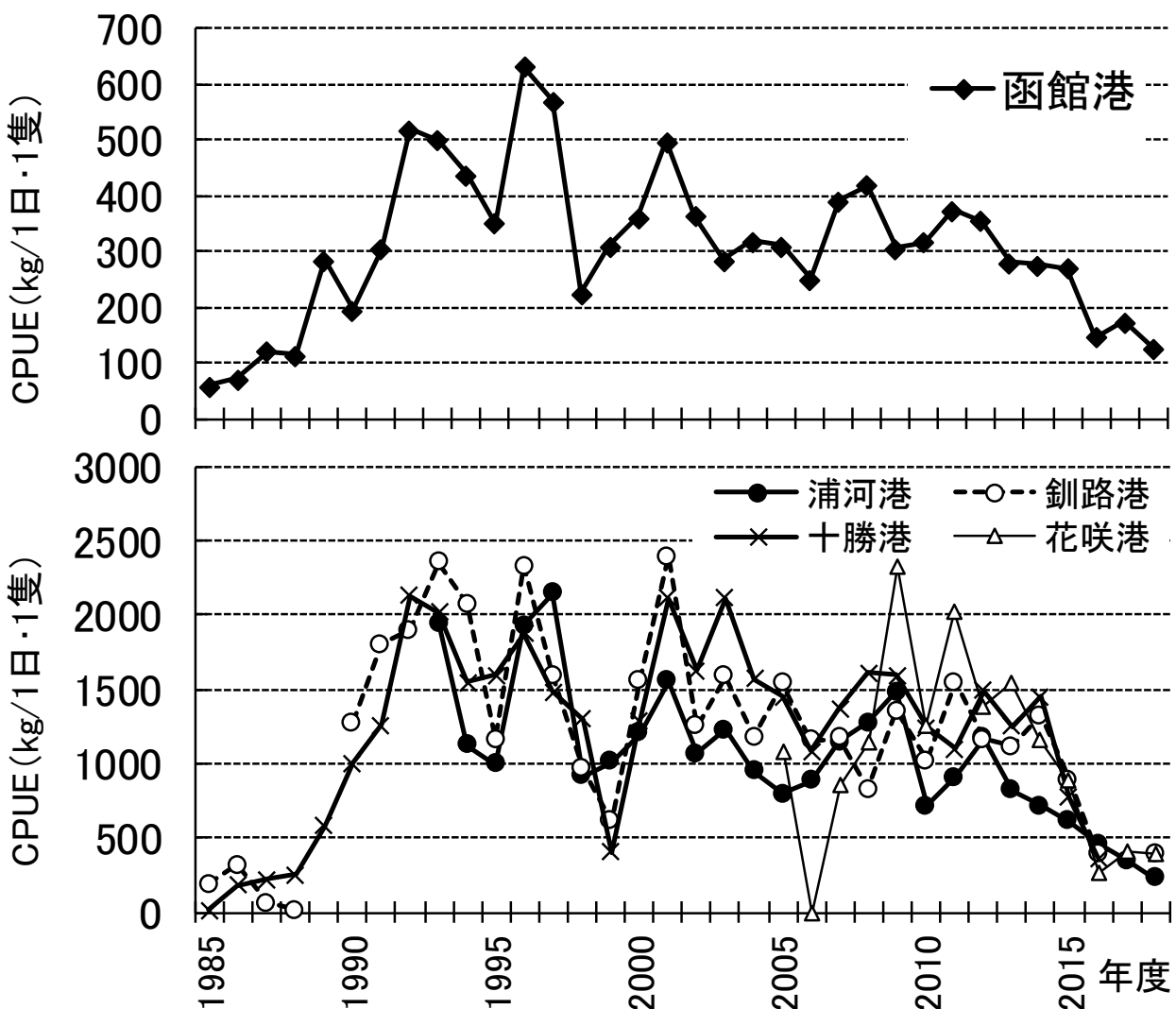


図5 太平洋主要港における小型いか釣り船CPUEの経年変化  
CPUEは1隻1日当りの漁獲重量

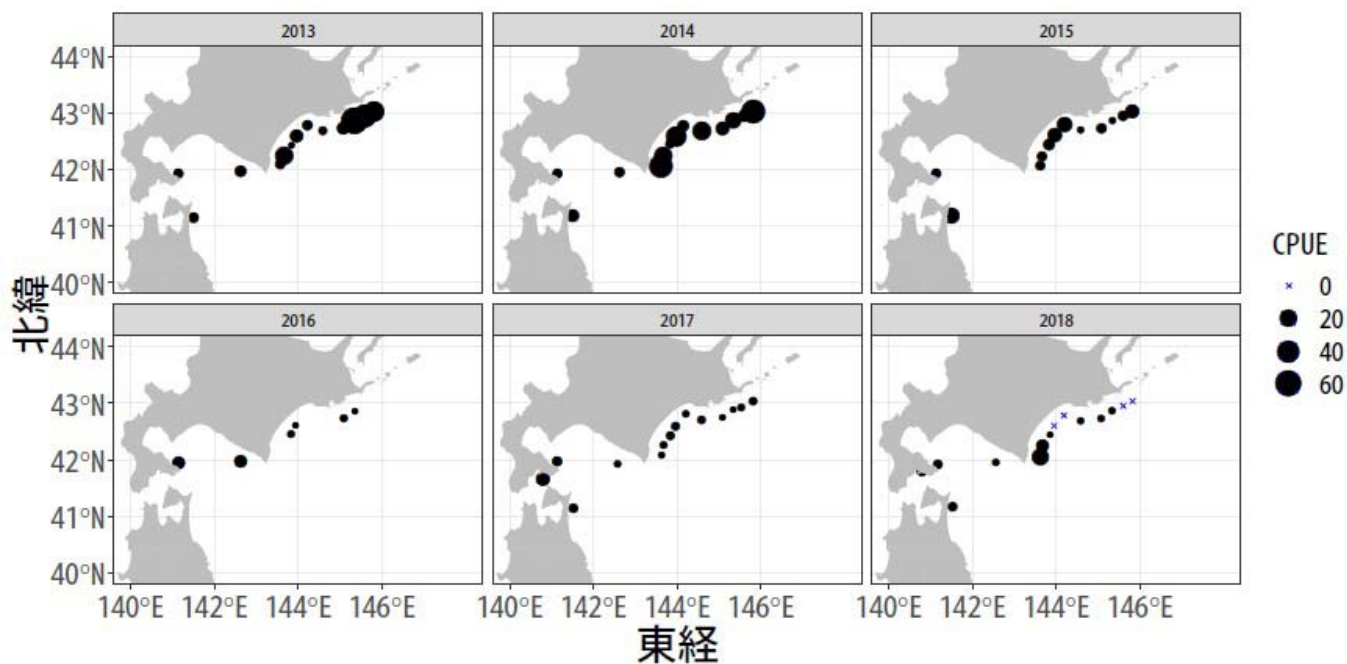


図6 試験調査船北辰丸および金星丸による過去6年の8月調査結果  
 ●は調査点で大きさはCPUE（尾数/1台1時間）を示す。×は漁獲なし

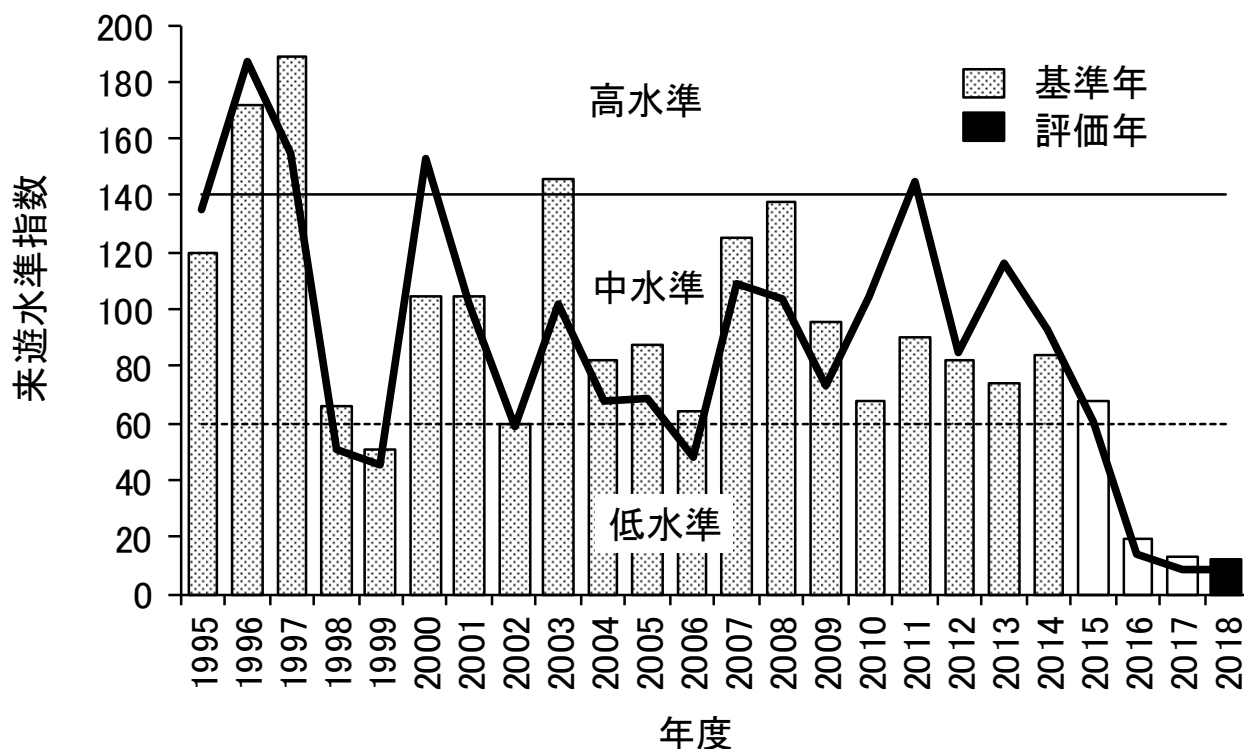


図7 北海道の太平洋～オホーツク海海域におけるスルメイカの来遊水準  
 (資源状態を示す指標：北海道太平洋海域漁獲量。折れ線は北海道太平洋海域及びオホーツク海海域の合計漁獲量を指標とした参考値)